

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果

令和6年1月15日
埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しています。

令和元年度以降保毒虫率が減少傾向にあり、今年度の調査結果は、保毒虫率が過去10年で最も低くなっています。ただし、コシヒカリ、キヌヒカリ等のイネ縞葉枯病感受性品種作付ほ場の周辺では保毒虫率がやや高い傾向が見られました。イネ縞葉枯病は移植後から幼穂形成期までに感染します。感受性品種では、育苗箱施薬剤等を用いた感染前の早めの予防対策を実施してください。

1 調査方法

令和5年11月に、県内25か所の水田周辺でヒメトビウンカ幼虫(写真1)をサンプリング(100頭程度/1か所)し、ELISA法(図1)により保毒虫を判定し、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を算出した。



写真1 ヒメトビウンカ幼虫
(体長2mm)

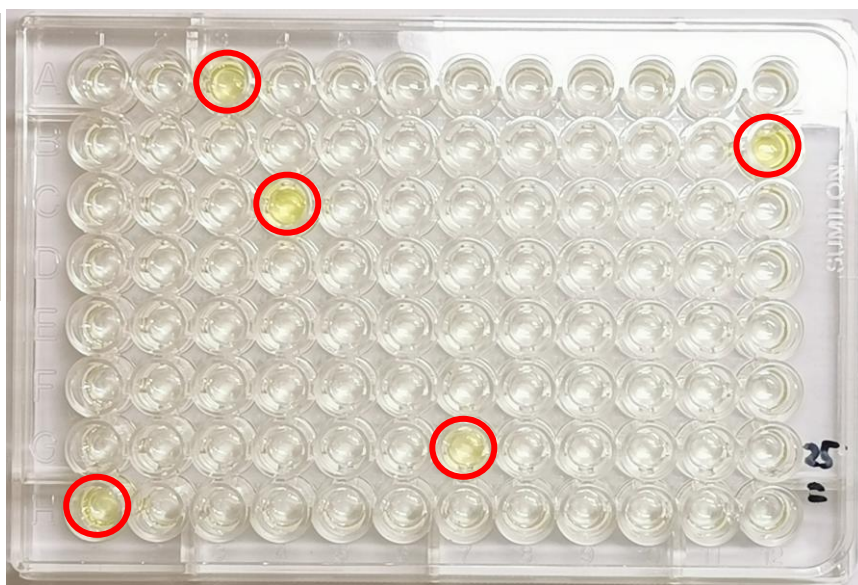


図1 ELISA法による保毒虫判定
ウイルス有り：黄色(○内)、ウイルス無し：無色

2 調査結果の概要

縞葉枯病抵抗性品種の作付比率が縞葉枯病感受性品種の作付比率を上回った令和元年度以降、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は減少傾向にあり、令和5年度は平均で2.4%と過去10年で最も低くなった(図2)。

昨年度は縞葉枯病感受性品種であるコシヒカリの早期栽培地域の保毒虫率が低い傾向だったが、令和5年度はコシヒカリ早期栽培地域を主体に5月中旬までの移植主体の地域で保毒虫率が若干高い傾向が見られた。ただし、5月下旬以降の移植地域でもキヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種作付ほ場の周辺では保毒虫率が高いこともあり、作期による統計的な有意差はなかった(表1)。

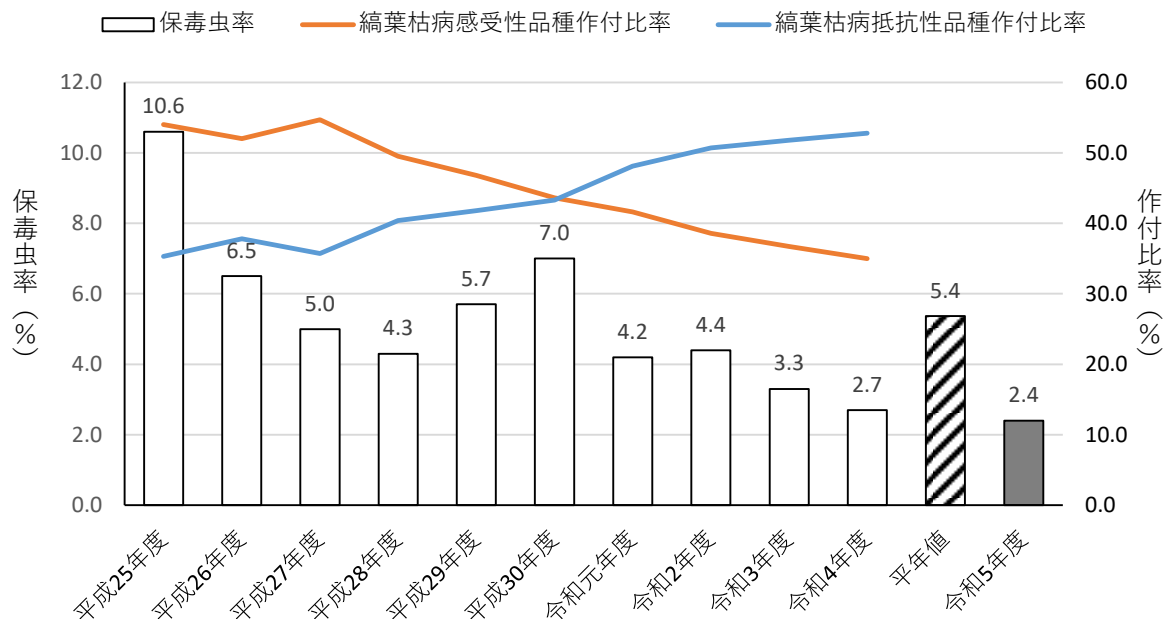


図2 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移

表1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率(令和5年度)

5月中旬までの移植地域		5月下旬以降の移植地域		
採集地点	保毒虫率(%)	採集地点	保毒虫率(%)	
さいたま市桜区昭和	3.1	坂戸市紺屋	1.0	
鴻巣市屈巢	1.0	小川町上横田	5.2	
富士見市南畑	2.1	川島町上八ツ林	1.0	
川越市古谷本郷	5.2	吉見町久保田	3.1	
熊谷市中曽根	2.1	嵐山町吉田	3.1	
加須市大越	1.0	秩父市小柱	0.0	
加須市柏戸	3.1	本庄市児玉町吉田林	0.0	
春日部市八丁目	4.2	美里町阿那志	4.2	
幸手市神扇	4.2	上里町長浜	2.1	
白岡市野牛	1.0	熊谷市中恩田	1.0	
		熊谷市御正新田	8.3	
		行田市前谷	1.0	
		行田市下池守	0.0	
		加須市下谷	1.0	
		久喜市菖蒲町台	2.1	
地域平均(10地点)	2.7	地域平均(15地点)	2.2	NS
採集地点数	25	平均保毒虫率(%)	2.4	